

コラム18： 人生の節目

人間も長く生きていくと、生きることに慣れてしまうのですかね。近頃は正月が来ても、新年を迎える感動とか、新鮮な喜びというのが、トンと感じられなくなりました。大晦日も正月も、昨日からの続きという感じで、特別の日ではなくなっているのです。新しい年の始まりという、生活の「節目」の感覚を、いつのまにか失ってしまっているのでしょう。これは、決していいことではありませんね。



かつて、私も「少年」と呼ばれた時があったわけですが、あの頃は「お正月」は、感動の世界でしたね。冬休みという形で、学校から解放され、自分が自由に生きれる時間をたっぷりと手に入れる、という喜びに満ちていましたね。花市場に入ってから、多くの勤め人と同様、正月は「ゆっくりと休める喜び」になりました。年末は、花市場という会社の仕事自体が、正月を迎えるための商品であふれてきます。シクラメンやシンビといったギフト商品ともに、松竹梅や門松が出荷され、松や千両の特別市も開かれ、その多忙さゆえに、年末から正月を迎えるムードが高まったものです。

このことは、花市場勤務の時に書いた「おっさんのつぶやき」の「その10. 初仕事」でも、昔の市場の年末風景として書いておりますが、当時は「門松づくり」が、会社の年末の大事な仕事でした。30年以上前の話ですから、午前中にセリを終えて、かたづけが終われば、他に仕事がないわけです。予約注文やネット販売、産地営業などに追われる、現在の市場とは隔世の感があります。門松は、花屋さんからの注文や、市場の前や、最寄りの JR の駅などに、寄付として飾るものなど、大小いろいろと、かなりの数量があったと思います。



12月の初めに門松用の竹の切り出しを現場の全員で行い、あとの竹の切断や加工そして組み立て、といった作業は、分担して専門化し、それぞれ同じ作業を、毎年していましたね。私は大抵は同年輩のM氏と組んで、竹の先を斧で削り、電気カンナを使用して、「門松の顔」の部分を作っていましたね。午前中にセリ作業と掃除が大抵終わっていましたから、午後からは、他に用のない現場の社員が、15～20名くらいで門松づくりをやるわけです。師走のやや肌寒い陽だまりの中で、男たちがそれぞれの分担に応じて、門松造りをしている姿は年末風景そのもので、完成させた大きな門松を、トラックで運んで、駅前などに建てると、年の瀬が迫ったことを実感したものです。

今思うに、「門松を作っていた頃は幸福だったのかな」と思いますね。一年の最後の出勤日には、門松を市場の入り口に建て、ケン縄を張り、セリ台に鏡餅を飾り、家に飾るしめ縄と正月花、それにボーナスをもらって、年越しそばを食べて帰っていましたな。見事なまでに、新年を迎える心の準備ができ、人生の節目がしっかりと出来ていた時代でしたね。

あの頃は、まだ私も30歳前後で若かった。下の写真は、私が結婚する前の正月に、市場の中に建てた門松の前で、今は亡き義父が撮った写真です。私も妻もあまりに変貌していますので、大変気恥ずかしいのですが、門松の写真はこれしか持っていないのです。一緒に造っていた人たちの多くがすでに他界され、あるいは私のように会社を去って、当時を知る者は少数になってしまいました。あの頃に戻ることはできないし、戻りたいとも思わないわけですが……。



当時は、決して喜んでやっていたわけではなく、「どうして、こんな儲かりもせん仕事をするんかのう」と疑問と反発を感じていました。しかし、今になって振り返ると、実に懐かしい年末の思い出なのです。人は、自分の過去の人生を、美化したがる傾向があるようです。人生の節目について書くつもりが、市場の昔話になってしまいました。門松に竹を使うのは、もしかしたら竹の節目が、「人生の節目」を意味するのかもしれませんがね。これは、現在の市場が「広島花き地方卸売市場」と呼ばれていた時代の話です。

「大昔の事を懐かしがとったら、生きて行けんわい。今のワシは、毎日が出勤日。明日はイチゴを何パック出せるか、野菜の寒肥をいつやるか、いうのが生活の節目みたいなもんかのう」

(13・1・20)